

アモス書7-9章「終わりに真っ直ぐにされる神」

1A 見過ごさない神 7

1B 神の忍耐と正義 1-9

2B 反対者への報い 10-17

2A 終わりが来たイスラエル 8

1B 喪に代わる祭り 1-10

2B 主のことばの飢饉 11-14

3A 根絶やしにされない方 9

1B 免れない災い 1-6

2B 倒れた仮庵の復興 7-15

本文

アモス書 7 章から見ていきます。アモスはずっと、北イスラエル王国に対する神の裁きの言葉を伝えて行きました。1-2 章で、周囲の国々に対する裁きを宣言し、3 章から 6 章までに北イスラエルを滅ぼすことを宣言なさいました。7 章から 8 章において、そのイスラエルへの裁きが終わりの日の幻へと発展し、そして 9 章で神が、倒れかけている仮庵のようにになっているイスラエルから、回復を約束してくださっている内容になっています。主が、イスラエルを真っ直ぐにされようとする情熱が伝わってきます。

1A 見過ごさない神 7

1B 神の忍耐と正義 1-9

7:1 神である主は、私にこのように示された。見よ。王が刈り取ったあとの二番草が生え始めたころ、主はいなごを造っておられた。7:2 そのいなごが地の青草を食い尽くそうとしたとき、私は言った。「神、主よ。どうぞお赦してください。ヤコブはどうして生き残れましょう。彼は小さいのです。」7:3 主はこのことについて思い直し、「そのことは起こらない。」と主は仰せられた。

7 章から 9 章までには五つの幻を主が彼に示してくださっています。これが一つ目です、いなごの災いです。ヨエル書においても、いなごによる災いがありましたね。その時に話しましたが、作物に壊滅的な打撃を与えるものとして、エジプトに対する災いにも、雹の災いの次に根こそぎ作物を食いつくすいなごの災いを下されました。ここに、「王が刈り取ったあとの二番草」とありますが、これは民が納税として王に収めることを話しています。王宮のための食糧のみならず、王に仕える軍があり、また軍馬もいます。食糧としての作物だけでなく、その家畜や馬の食べる草も必要です。初めの収穫が王に収めるものですが、その後に生え出る収穫を二番草と呼びます。それに対して、主が今、いなごを送ろうとされているのです。

アモスの預言者としての心が、執り成しに表れています。アモスが主から与えられた重荷、裁きの宣告を語る時に、彼自身がそのような義憤に燃えているのかと言えば、そうではありません。自分はこのような柔らかい心、普通の感情を有していました。エレミヤ書にも、エゼキエル書にも、エレミヤ人、エゼキエル自身の執り成す言葉が聞こえます。例えばエゼキエル 11 章 13 節、「こうして、私が預言しているとき、ベナヤの子ペラテヤが死んだ。そこで、私はひれ伏し、大声で叫んで言った。「ああ、神、主よ。あなたはイスラエルの残りの者たちを、ことごとく滅ぼされるのでしょうか。」とあります。これが、神のことばを持っている者たちのあるべき姿です。私たちは神を恐れるべきです。神の正しさを私たちは伝えますが、私たちは神のことばを持っていない他の人々と何ら変わらない存在なのだということ、ゆえに恐れかしこみつつ、人々を助け、救う働きの中に入っているのだということを知るべきです。

アモスが、「神、主よ。どうぞお赦してください。ヤコブはどうして生き残れましょう。彼は小さいのです。」と祈って、それで主が思い直されています。ヤコブが生き残れない、小さいというのは、彼の目線で見得ることではなく、神の目線で見得ることです。ヤロブアム二世の時のイスラエルは、強く、豊かでした。しかし、神の偉大な力の前では、ヤコブはあまりにも小さく、生き残ることはできません。しかし神が思い直されているのは、神が怒るに遅く憐れみに富んでおられるからです。神ご自身が敢えて、小さい部族であったヤコブの子孫を国々の中から取り上げて、それでご自分の民とし、国民とされたからです。神は正しく裁かねばなりません、けれども彼らが悔い改め、主のもとに立ち帰り、災いから遠ざかることを願っておられます。ですから、アモスの執り成しは、御心になかったことであり、実は主ご自身の思いが彼に与えられていたと言ってよいでしょう。事実、ヤロブアム二世の治世が繁栄したのは、主の憐れみによるものでした(2列王 14:25-27)。

7:4 神である主は、私にこのように示された。見よ。神である主は燃える火を呼んでおられた。火は大淵を焼き尽くし、割り当て地を焼き尽くそうとしていた。7:5 私は言った。「神、主よ。どうか、おやめください。ヤコブはどうして生き残れましょう。彼は小さいのです。」7:6 主はこのことについて思い直し、「このことも起こらない。」と神である主は仰せられた。

ここでの「燃える火」は、作物が干からびるような熱風や日照りのことであると考えられます。「大淵」というのは、地下水のことです。泉が出て来る源になっている、地下に脈打つ水の流れのことです。主があまりにも雨を降らせないので、そうした地下水までが干上がるということでもあります。このことも、アモスが執り成しをして、それで神が思い直されています。しかし次の幻においては、そうではありません。

7:7 主は私にこのように示された。見よ。主は手に重りなわを持ち、重りなわで築かれた城壁の上に立っておられた。7:8 主は私に仰せられた。「アモス。何をみているのか。」私が「重りなわです。」と言うと、主は仰せられた。「見よ。わたしは重りなわを、わたしの民イスラエルの真中に垂れ下げ

よう。わたしはもう二度と彼らを見過ごさない。7:9 イサクの高き所は荒らされ、イスラエルの聖所は廢墟となる。わたしは剣をもって、ヤロブアムの家に立ち向かう。」

「重りなわ」であります。新共同訳では「下げ振り」と訳されています。城壁が真っ直ぐに建てられているかを下げ振りによって確かめます。ここでは、イスラエルが真っ直ぐになっているかどうかを下げ振りによって確かめておられる姿です。「正義」の元々の意味は、「真っ直ぐ」です。ですから、主が今、民が曲がってしまっている姿を見えています。ちょうど、倒れかけている城壁のように、真っ直ぐに建てられていない姿を見られます。それで、主はそれを破壊されることを意図されています。主は、「わたしはもう二度と彼らを見過ごさない。」と言われました。主が忍耐深い方であり、あまりにも待ってくださる方です。誰一人滅びることを望まず、悔い改めることを願っておられます。けれども、それは神が正しく裁かないことを意味していません。神は何もしないということでは、決してありません。多くの人が、神の忍耐深さと憐れみを神は何もしない、あるいは何もできないとみなして、神を非難する、あるいは悔い改めないで罪を行ない続けます。しかし、決して見過ごさないという言葉に心を留める必要があります。

そして、「イサクの高き所は荒らされ」という言葉があります。これは何を意味するのか？イスラエルの民は、自分たちがまことの神、唯一の神を信じているとしながら、中身が偶像礼拝になっていっていました。ヤロブアム一世の金の子牛もそうですが、イサクの生まれ育ったベエル・シェバにも、彼らの偶像礼拝の地があったようです。8章14節には「ベエル・シェバの道は生きている」という言葉があり、そこに高き所があったと考えられます。そして、「イスラエルの聖所」というのは、ベテルのことかもしれません。金の子牛が祭られて、ヤハウエを礼拝していると偽っていた所です。そして「ヤロブアムの家に立ち向かう」とありますが、ヤロブアム二世のことです。アモスが預言をしているとき、まさに彼が生きてイスラエルを治めていました。この預言は、ヤロブアムの子ゼカリヤによって実現しました。ゼカリヤはわずか六か月のみ、イスラエルを治めました。自分の家臣であるシャルムによって暗殺されたからです(2列王 15:10)。

2B 反対者への報い 10-17

7:10 ベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わしてこう言った。「イスラエルの家のただ中で、アモスはあなたに謀反を企てています。この国は彼のすべてのことばを受け入れることはできません。7:11 アモスはこう言っています。『ヤロブアムは剣で死に、イスラエルはその国から必ず捕えられて行く。』7:12 アマツヤはアモスに言った。「先見者よ。ユダの地へ逃げて行け。その地でパンを食べ、その地で預言せよ。7:13 ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王宮のある所だから。」

アモス書、またホセア書もそうでしたが、北イスラエルは宗教熱心であったけれども、真っ直ぐな神の言葉に対しては忌み嫌っていました。2章12節に、「預言者には、命じて、預言するなど言っ

た。」とあります。熱心であるけれども、神の聖い言葉ではないものが代わりになっていて、それでむしろ神の御心に反することを言っているという問題があります。次の章で、主のことばについての飢饉、ということでその問題を主が取り扱っておられます。けれども、主の聖い言葉がなければ、聖くなることも、正しく生きることもできません。

「ベテルの祭司」であります。そこにはもちろんヤハウエの名のゆえに祭られた金の子牛があります。そこに王によって雇われている祭司がいます。その祭司が、アモスに対して脅迫しました。預言者エレミヤの時も、そうでした。迫害の急先鋒には祭司や偽預言者がいました。26節を見ると、祭司と預言者たちが集まり、エレミヤが死ななければならないとしました。宮が廃墟となると予言したからだ、ということです。ところが、首長たちが祭司や預言者に対して言いました。「この人は死刑に値しない。」と。そして預言者ミカが預言した、エルサレムの廃墟の言葉によって、ヒゼキヤが悔い改めて、その災いを主が思い直されたという話をして、エレミヤは命拾いました。新約聖書でもそうですね、イエス様を迫害したのは宗教指導者たちでした。使徒たちを迫害したのも、宗教指導者たちです。つまり、神の人に対する真の迫害者は、世の人ではなく、むしろ背教した宗教人であることが分かります。

そして、アマツヤはヤロブアム二世に訴えますが、「ヤロブアムは剣で死」ぬと言いましたが、ヤロブアムではなく、ヤロブアムの家に立ち向かうと預言しただけです。それをヤロブアムが死ぬと聞いて謀反の罪に仕立て上げました。そしてアマツヤはアモスに、「パンを食べ、その地で預言せよ」と言っていますが、そこに彼が祭司職にいる動機が描かれています。彼はパンを食べるために、祭司の務めをしていたのです。召命ではなく、自分の生活の糧にするために行っていました。そしてユダへ逃げて行けと言っているのは、もちろん縄張り争いの意味合いのある言葉でしょう。そしてベテルが王の聖所、王宮のあるところだと言っているのは、自分が王に雇われているから、そう言っています。ですから、彼が宗教を行なっているのはあくまでも自分の家の生活のためであり、神の教えに突き動かされているわけではありません。それに対するアモスは、神の全くの主権によって、神の預言を語っています。

7:14 アモスはアマツヤに答えて言った。「私は預言者ではなかった。預言者の仲間でもなかった。私は牧者であり、いちじく桑の木を栽培していた。7:15 ところが、主は群れを追っていた私をとり、主は私に仰せられた。『行って、わたしの民イスラエルに預言せよ。』と。

午前礼拝のメッセージを思い出してください、神の召しによって預言を行なっています。アマツヤとはあまりにも対照的であります。羊飼いと生活の糧を得ているところに、神に捕えられて、預言をしなさいという神の命令だけが、彼がベテルで預言をしていた動機でした。

7:16 今、主のことばを聞け。あなたは『イスラエルに向かって預言するな。イサクの家に向かって

預言するな。』と言っている。7:17 それゆえ、主はこう仰せられる。『あなたの妻は町で遊女となり、あなたの息子、娘たちは剣に倒れ、あなたの土地は測りなわで分割される。あなたは汚れた地で死に、イスラエルはその国から必ず捕えられて行く。』』

アマツヤに対する預言は厳しいものです。彼は、生活の糧のゆえに祭司をしていましたが、それが脅かされるので預言するな、と言いました。けれども、その生活、つまり自分の家族の妻が遊女となります。息子と娘は剣で倒れます。そして自分の所有の土地は分割されます。そして汚れた地、と言っていますが、これは彼が祭司であり、聖なる地ということは意識していたからです。その汚れた地、異教の地において彼は死にます。生き残っているイスラエル人も捕え移され、アッシリヤに行きます。このように、教師に対しては格別に厳しい裁きがあります。「ヤコブ 3:1 私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。」

2A 終わりが来たイスラエル 8

そしてさらに、主は幻をアモスに見せます。

1B 喪に代わる祭り 1-10

8:1 神である主は、私にこのように示された。そこに一かごの夏のくだものがあった。8:2 主は仰せられた。「アモス。何をみているのか。」私が、「一かごの夏のくだものです。」と言うと、主は私に仰せられた。「わたしの民イスラエルに、終わりが来た。わたしはもう二度と彼らを見過ごさない。8:3 その日には、神殿の歌声は泣きわめきとなる。…神である主の御告げ。…多くのしかばねが、至る所に投げ捨てられる。口をつぐめ。」

主は、ここでアモスに、終わりが来たことを告げておられます。なぜ、「一かごの夏のくだもの」なのかと言いますと、言葉の語呂合わせがあります。夏の果物が、ヘブル語で「カイツツ」^{קַיִטְצִי}と言いますが、終わりが、「ケーツツ」^{קָעִיטְצִי}と言います。夏のくだものは、一年の収穫の終わりを飾る意味合いで、音が似ているのです。主は、「わたしはもう二度と彼らを見過ごさない。」という、彼らの安楽な生活が終わりになったのだということを告げられています。そこで、強調されているのが、「神殿の歌声は泣きわめきとなる」ということです。楽しそうに聞こえる歌声が、一気になくなります。なぜなら、そこで人々が無残にも殺されるからです。「口をつぐめ」という言葉がありますが、これは「シーツ！」と黙らせている言葉です。なぜか？人は、あまりにも恐ろしい場面を見た時に、その恐ろしさに対して、嘆くことも悲しむこともできない、何も言えなくなるからです。

8:4 聞け。貧しい者たちを踏みつけ、地の悩む者たちを絶やす者よ。8:5 あなたがたは言っている。「新月の祭りはいつ終わるのか。私たちは穀物を売りたいのだが。安息日はいつ終わるのか。麦を売りに出したいのだが。エパを小さくし、シェケルを重くし、欺きのはかりで欺こう。8:6 弱い者

を銀で買い、貧しい者を一足のくつで買い取り、くず麦を売るために。」

神殿において祭りが行われております。また安息日が守られております。しかし、彼らの心は礼拝にありませんでした。神への敬いもありませんでした。そこには、貧しい者を踏みつけること、そして悩む者たちを絶やしてしまうことがありました。虐げと欺き、そして貪欲です。祭りや安息日には、商売ができないので、いつになったら終わるのかと焦っています。そして何をするのかというと、「エパを小さくし、シェケルを重くし、欺きのはかりで欺こう」ということです。エパは穀物を量るための約それから、「弱い者を銀で買い、貧しい者を一足のくつで買い取る」ということ。そして、「くず麦を売る」すなわち、食べ物にも何にも役に立たないものを売って欺きをすることでありました。

8:7 主はヤコブの誇りにかけて誓われる。「わたしは、彼らのしていることをみな、いつまでも、決して忘れない。8:8 このために地は震えないだろうか。地に住むすべての者は泣き悲しまないだろうか。地のすべてのものはナイル川のようにわき上がり、エジプト川のように、みなぎっては、また沈まないだろうか。

主は、「ヤコブの誇りにかけて誓われる」と言われます。今ある姿は、ヤコブに与えられた神の榮譽の名に、あまりにも劣るものであります。ゆえに、これを行なっていることは決して忘れないと言われています。悔い改めないままで、暴虐と欺きの限りを尽くしたのに、それでも何事もなかったかのように、神を信じると言っている者たちがいつものとおりに生きていたら、それは神には忘れられることはない、ということです。そして、主はこのように安定した生活を根底から揺るがすことを行われます。「地を揺るがす」ということです。ナイル川に例えられていますが、それはナイル川が氾濫し、また水が引きますが、その変化の激しい様のように、地を揺り動かすということです。ここから、終わりといってもアッシリヤ捕囚を超えた、終わりの日の幻が映し出されているのです。地表が揺れ動くことについて、イザヤ書 2 章において、国が金銀で満ち、偽りの神々で満ちている時に、人間が低くされたと書かれています。それゆえ、主が立ち上がり、地をおののかせて、そうした人々のおごり高ぶる心を低くすることが書かれています。これが黙示録 6 章に引用されて、そこには鮮やかに、地表が巻き物が巻かれるように消えてなくなるほどの大地震が起こる事が書かれています。このことを、アモスはエジプトのナイル川に例えているのです。

8:9 その日には、**神である主の御告げ**。わたしは真昼に太陽を沈ませ、日盛りに地を暗くし、
8:10 あなたがたの祭りを喪に変え、あなたがたのすべての歌を哀歌に変え、すべての腰に荒布をまとわせ、すべての人の頭をそらせ、その日を、ひとり子を失ったときの喪のようにし、その終わりを苦い日のようにする。

この「その日」とは、終わりの日でありながらも、私たちは主ご自身が十字架に付けられた時に成就したことを知っています。その日は過越の祭りです。しかし、イエス様がそこで宮清めを行な

われていたように、彼らは神の宮を強盗の素にしていたのです。まさにアモスがここで預言していたようなこと、そうした心の状態になっていたのです。ですから、神が祭りを、真昼の時に暗闇認変えられたのです。正午から午後三時にかけて全地が暗くなりました。それは、終わりの日に主が行なわれる暗黒を、神の怒りの現われを示しているということです。主ご自身は、神の怒りの杯をそこで私たちに代わって受けられました。それは、殺人より酷い出来事でした。そして殺神とでも呼びましょうか、「ひとり子を失った」とあるように、神のただ独り子が失われたのです。

2B 主のことばの飢饉 11-14

8:11 見よ。その日が来る。・・神である主の御告げ。・・その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渴くのもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。8:12 彼らは海から海へとさまよい歩き、北から東へと、主のことばを捜し求めて、行き巡る。しかしこれを見いだせない。8:13 その日には、美しい若い女も、若い男も、渴きのために衰え果てる。8:14 サマリヤの罪過にかけて誓い、『ダンよ。あなたの神は生きている。』と言い、『ベエル・シェバの道は生きている。』と言う者は、倒れて、二度と起き上がれない。」

主が終わりの日に行われることが、次に、「主のことばを聞くことの飢饉」ということです。アッシリヤの捕囚後、彼らが主の言葉を聞かないので衰え果てたのと同じように、彼らがキリストを拒んで紀元後七十年に、ローマによって捕え移されて、何が飢えていたかと言えば主のことばを聞くことであつたでしょう。けれども、ここは一般的な人間の霊的な飢饉であると言えるでしょう。

人々が主の言葉を聞くことが出来ないというのは、主がもうお語りにならなくなったということではありません。主が語っても、悟ることができない、聞くことができなくなったということです。目に見えないものを見ることができない、ということがあるでしょう。人の命について、考えられなくなったということがあるでしょう。すべてを超越した存在について考えることができなくなっている。そして、神の声を聞くことそのものに興味を失っているということです。その理由が、代替物があるからです。ダンにおける金の子牛、そしてベエル・シェバには、おそらくはイサクの高き所があり、実際は偶像礼拝でした。イスラエル全体をダンからベエル・シェバまでという表現がありますが、全イスラエルが、神のことば抜きに宗教的体験を求めているからです。繁栄の町ニューヨークで、牧会をしているテモシー・ケラーという人は、「人の心は偶像工場」と言いました。すなわち、どんなに良い理念、美德であっても、それ自体を目標としたらそれがそのまま偶像になるということです。これが、豊かで安定した社会に生きている者たちの、戦わなければいけない罪でしょう。私たちが、聖なる神の言葉を聞いていなければ、神以外のものを神とし、心に偶像を宿していることとなります。

このように、主の言葉を聞くことに飢饉が来ると、「さまよい歩」ということが起こります。無知のゆえに、心が定まらないのです。心が落ち着かないのです。それで、ある時はあそこに行き、またある時は別のところに行きます。「海から海へと」というのは南の死海から西の地中海、ということ

です。そしてそこから北に行き、東へ回ったが、どこにも主の言葉を聞けるところはなかった、ということ。イスラエルを一周したけれども、どこにも主の預言者はいなかったということでしょう。

そして、生き活きとして、力のある象徴である、「美しい若い女も、若い男」が渴きのために衰え果てます。今の時代は彷徨うのですが、次の時代は衰えます。その前の時代の人たちは、まだ、主の言葉を教えられた過去を知っていて、歪んでいるけれどもそれを知っています。しかし、次世代はその教えられた過去さえありません。それで、中身のない宗教、ただ心理的な満ち、肉体的な満ち、印象や感情、感覚、あるいは知的欲求の満ち、もっと墮落すれば肉欲の満ちさえるでしょう、そういったものしか存在しないのですが、その中で窒息して死んでしまうのです。

3A 根絶やしにされない方 9

そして次は、そのベテルにおける宮が、一挙に破壊される幻を主がアモスにお見せになります。

1B 免れない災い 1-6

9:1 私は、祭壇のかたわらに立っておられる主を見た。主は仰せられた。「柱頭を打って、敷居が震えるようにせよ。そのすべてを頭上で打ち砕け。わたしは彼らの残った者を、剣で殺す。彼らのうち、ひとりも逃げる者はなく、のがれる者もない。

主が立っておられるところは、ベテルの神殿だと思われます。偶像の宮と化しているその神殿の柱頭をうちなさいと主が命じられています。ちょうどこれは、サムソンがペリシテ人の宮にいた時の状態に似ていると思います。サムソンが柱頭に投げかかり、それで二階にいた人々がみな落ちて来て、下にいる人々はもちろん下敷きで倒れます。それだけでありません、生き残ったとしても、アッシリヤ兵によって剣で殺されていきます。

9:2 彼らが、よみにはいり込んでも、わたしの手はそこから彼らを引き出し、彼らが天に上っても、わたしはそこから彼らを引き降ろす。9:3 彼らがカルメルの頂に身を隠しても、わたしは捜して、そこから彼らを捕え出し、彼らがわたしの目を避けて海の底に身を隠しても、わたしは蛇に命じて、そこで彼らをかませる。9:4 もし、彼らが敵のとりことなって行っても、わたしは剣に命じて、その所で彼らを殺させる。わたしはこの目で彼らを見る。それは、わざわいのためで、幸いのためではない。」

人は、どこかに行ってそれで生き伸びる道を捜します。けれども、主はどこに行ってもそこで捕らえだして殺させると言われています。災いから免れることはできない、ということです。陰府ですから、地の下ですが、そこにいても、天に上っても、そこからも引き降ろすということです。神は天においても、地においても、そして地の下においても全ての力と権威を持っておられる方です。良い方を変えれば、私たちの主イエス・キリストは天におられたけれども、地に來られて、陰府にまで

下られ、そして復活し、天に昇られました。贖いの働きにおいても、神とキリストは全権を持っておられます。

そして、「カルメル山」とありますが、イスラエルにおいてはそこが高い地点です。そして海の底の「蛇」とは、ヨブ記などに登場するレビヤタン(41:1)、海の家獣のことです。そこにいても、その蛇に噛まれるだけだと言われます。そして、「わたしはこの目で彼らを見る。」と言われますが、どこにいても、主が見ておられるのです。

9:5 万軍の神、主が、地に触れると、それは溶け、そこに住むすべての者は泣き悲しみ、地のすべてのものはナイル川のようにわき上がり、エジプト川のように沈む。9:6 天に高殿を建て、地の上に丸天井を据え、海の水を呼んで、地の面に注がれる方、その名は主。

主は、地を揺るがすだけでなく、溶かします。人々の生活のその土台を無くすことによって、彼らが生きることが出来ないようにされます。詩篇 46 篇 6 節には、「国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいた。神が御声を発せられると、地は溶けた。」とあります。そして人々が泣き悲しみますが、それは悔い改めないで、どんどん死んでいく中の泣き悲しみです。パウロが言いました。「2コリント 7:10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」そして先ほどと同じように、エジプトの川、ナイル川を地上にたとえていて、そのような揺れ動きを彼らが経験するということです。それから、主が地上だけでなく、天においても権威と力を持っておられることを宣言しています。

2B 倒れた仮庵の復興 7-15

9:7 「イスラエルの子ら。あなたがたは、わたしにとって、クシュ人のようではないのか。…主の御告げ。…わたしはイスラエルをエジプトの国から、ペリシテ人をカフトルから、アラムをキルから連れ上ったではないか。9:8 見よ。神である主の目が、罪を犯した王国に向けられている。わたしはこれを地の面から根絶やしにする。しかし、わたしはヤコブの家を、全く根絶やしにはしない。…主の御告げ。…

地を揺り動かし、天においても異変を起こし、その中にあって人の生存の根源を揺り動かすことによって、それで主はイスラエルに呼びかけられているのです。彼らが存在し、生きているのは、全くの神の憐れみだったのです。「わたしにとって、クシュ人のようではないのか」と主は言われます。クシュ人はエチオピア人とも訳されますが、今のエチオピアだけでなくアフリカ中部にあるスーダンも含む大きな国でした。イスラエルは、神の憐れみによって注目されるようになりますが、その存在は実に、クシュ人のような、辺境の民であったということです。クシュのすぐ上、エジプトにおいて彼らは奴隷でした。そこで主は、彼らを救い出されたのです。

そして主は、イスラエルの民は他の民とそういった意味で何ら変わらないのだということを強調するために、ペリシテ人の変遷とアラム人の変遷をも言われています。ペリシテ人は、地中海のカプトル、今のクレテ島が出身です。そしてアラム人は、アッシリヤにあったキルが出身であり、そこから移住していた民です。同じようにイスラエルは、南のエジプトから移住してきた民であり、そこには差別はないのです。何が特別と言え、それはもっぱら神の憐れみ、その愛が注がれていることだけです。

そして主は、「神である主の目が、罪を犯した王国に向けられている。」と言われます。先に言われた、神の目が注がれている、災いのために注がれているということです。ここで、「これを地の面から根絶やしにする」と言われながら、「ヤコブの家を、全く根絶やしにはしない」と一見、矛盾したことを言われているのが大事な点です。ヤロブアム二世のような王国は根絶やしにされます。けれども、その中にいる家、その原型であるヤコブの家は、全くは根絶やしにしないということです。王国という外側の形は全くなされてますが、中にいる民の全てを滅ぼすことはなさない、ということです。ここに、主はご自分が選ばれたと言われている民をお見捨てにならない、選びの確かさがはっきりと現れています。そして、王国にある栄華や富、そういったものは全てそり落とした上で、その僅かな者たちを救い出されるということです。

9:9 見よ。わたしは命じて、ふるいにかけるように、すべての国々の間でイスラエルの家をふるい、一つの石ころも地に落とさない。9:10 わたしの民の中の罪人はみな、剣で死ぬ。彼らは『わざわいは私たちに近づかない。私たちまでは及ばない。』と言っている。

主は、イスラエルの民をふるいにかかけられます。「すべての国々の間でイスラエルの家をふるい」とありますが、世界に離散したユダヤ人のことです。彼らがそれぞれの場所で患難を通ります。終わりの日には、それがヤコブにとっての苦難とエレミヤが預言したところを通ります。その中で、悔い改めない罪人は、ユダヤ人と言えどもふるいにかかけられ、殺されるのです。ここでの「ふるい」の喩えは、落ちて行った穀物が有用であり、ふるいに残ったのは石ころですね。石ころのほうは抜き取られるので、落ちて行ったほうが救われるという感じです。

そして、彼らの根本的な過ちが書かれています。「わざわいは私たちに近づかない。私たちまでは及ばない。」であります。それは、これまで読んで来たとおり、災いは必ず近づくのです。彼らにも及ぶのです。もっぱら神の憐れみによって救われているのに、自分たちに救われるべき特性や属性があると思っていれば、欺かれています。次のオバデヤ書は、エドム人に対して書かれています。彼らはボツラという岩に囲まれたところで、同じように考えていました。災いは自分たちには及ばない、と。イスラエル人も、そこに隠れます。反キリストが現れた時に、エルサレムまたユダヤから彼らがこちらのほうに逃げて来て、逃れます。けれども、岩が彼らを助けるのではなく、再臨の主が助けられます。しかし、ユダヤ人として悔い改めない者たちは、必ず剣で死ぬということです。

9:11 その日、わたしはダビデの倒れている仮庵を起し、その破れを繕い、その廃墟を復興し、昔の日のようにこれを建て直す。9:12 これは彼らが、エドムの残りの者と、わたしの名がつけられたすべての国々を手に入れるためだ。..これをなされる主の御告げ。..

ここに、すばらしい回復の約束があります。「ダビデの倒れている仮庵」です。仮庵とは、荒野で旅をしているイスラエル人が天幕を張っていたことを覚えるのが、仮庵の祭りと言いますが、仮の庵です。農作をする時に、とりあえず雨風をしのぐための小屋です。それが、倒れかけています。そこに残されているユダヤ人たちを、ダビデの倒れている仮庵に喩えておられるのです。しかし、無から有を創造された神は、倒れかけている仮庵であっても、その破れを繕い、廃墟を復興させていただきます。「昔の日」とありますが、この昔は永遠と同じヘブル語が使われています。はるかかなたの昔ということです。具体的には、ダビデの時代のことです。ダビデの子キリストが建て直してくださる国です。

そして、その時に、「エドムの残りの者と、わたしの名がつけられたすべての国々を手に入れるため」とあるのです。エドムに対しては、完膚なきまでの裁き、また永遠の廃墟が他の箇所でも預言されています。しかし、主はそこにもエドムの残りの者を置いておられます。しかも、彼らはヤコブの子孫を憎んでいた者たちです。ヘロデ大王のエドム人の末裔であり、御子を殺そうとさえしました。しかし、憎まれ者であっても、主はダビデの仮庵を建て直される時に、主に立ち返るのであれば、その者も御国の中に入れてくださいます。

さらに、「わたしの名がつけられたすべての国々」とあります。これが画期的です。イスラエルに神の名が付けられていると書かれておらず、全ての国々と書かれているのです。すなわち主は、異邦人に対してもご自分の名を付けておられるということです。それが誰でしょうか？そうです、イエスの御名を呼び求める異邦人である、世界中のキリスト者らであります。初代教会は、このアモスの預言を根拠に、異邦人が異邦人のままで救われる、御国を相続することが出来ることを決めました。使徒の働き 15 章を思い出してください、ヤコブが立ち上がりました。「15:14-19 神が初めに、どのように異邦人を顧みて、その中から御名をもって呼ばれる民をお召しになったかは、シメオンが説明したとおりです。預言者たちのことばもこれと一致しており、それにはこう書いてあります。『この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廃墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。それは、残った人々、すなわち、わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めるようになるためである。大昔からこれらのことを知らせておられる主が、こう言われる。』そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。」

9:13 見よ。その日が来る。..主の御告げ。..その日には、耕す者が刈る者に近寄り、ぶどうを踏む者が種蒔く者に近寄り。山々は甘いぶどう酒をしたたらせ、すべての丘もこれを流す。

主の約束の地における回復です。豊かな収穫の幻です。「耕す者が刈る者に近寄」とは、秋に収穫がありますが、それがあまりにも豊作であり、刈り取っているのですが、冬に入る時にイスラエルでは種を蒔きます。その種蒔きまで収穫が続いているということです。そして、「ぶどうを踏む者が種蒔く者」というのも同じです。ぶどうの実の収穫が続いて、それを酒ふねで踏んでいるのですが、次の収穫のための種まきが始まっていることということです。それだけ、ぶどう酒が豊かになるので、山々がぶどう酒で滴っているのです。

9:14 わたしは、わたしの民イスラエルの捕われ人を帰らせる。彼らは荒れた町々を建て直して住み、ぶどう畑を作って、そのぶどう酒を飲み、果樹園を作って、その実を食べる。9:15 わたしは彼らを彼らの地に植える。彼らは、わたしが彼らに与えたその土地から、もう、引き抜かれることはない。」とあなたの神、主は、仰せられる。

イスラエルの民が捕らわれていたところから戻ってきます。ユダヤ人の帰還の流れは、十九世紀の時から大きな波が始まりました。そして二つの世界大戦を経て、ユダヤ人がそこにイスラエルを建国しました。そして今に至るまでユダヤ人は帰って来ています。それに伴い、農地が開墾されました。荒地と沼地でしかなかったところが、緑豊かになり、農作物を輸出するほどになりました。しかし、それはまだ前段階であります。異邦人も贖われ、イスラエル人も贖われなければいけません。キリストを受け入れ、救われたいといけません。主が再臨される時は、霊肉ともに贖われたイスラエルが約束の地に定着します。

そして素晴らしい約束は、「わたしが彼らに与えたその土地から、もう、引き抜かれることはない。」という約束です。もう二度と、彼らを苦しみの中に戻すことはありません。彼らへの救いは永遠です。引き抜かれることはありません。イスラエルへのこの約束は、キリスト者一人一人への約束でしょう。「ヨハネ 10:27-28 わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」